# 砂防事業と地域活性化―歴史的砂防施設アカタン砂防からの報告―

田倉川と暮らしの会
事務局　田　中　保　士

## 1．はじめに

アカタン砂防は、福井県南越前町古木に位置する。九頭流川水系日野川支流田倉川に注ぐ赤谷川に点在する、明治の歴史的砂防施設である。そこで活動する地域団体「田倉川と暮らしの会」の活動から、地域活性化の原動力となっている行動と課題、方向性について報告する。先ず、アカタン（赤谷）砂防事業の経緯について概要を述べる。

●1985年（明治28）９月30日土砂流出災害が発生し、今庄南部山地各集落が被災した。

福井県砂防沿革大要（1903年（明治36）１月調べ）には、アカタンの土砂流出災害について記録されている。判読すると次のようだ。

「赤谷川は、源を南条郡宅良村大字古木の山間渓谷より発し、同大字宇上の尾において田倉川に入る。その流路一里半ばかり。1895年（明治28）９月30日大豪雨があり、土砂流出し渓間に存在する十数町余りの田畑はことごとく埋没した。幅わずか三間ばかりの渓流は、にわかに30間ばかりとなる。流出土砂は、一時田倉川を充塞（じゅうそく）した。」

「宇大平に崩壊があり、明治33年度に至って始めて砂防法の規程に基づき砂防工事が始まった。石材は渓間に露出するものを選び採取したが、その数量もまた自ずと限りが有る。芝草のごときは絶えて見ることができない。萱株を代用にするに至り、全川の江事を一斉に着手しなければならない状況である。また、積苗工にマツ、山榿（ヒメヤシャブシ）を混合植えつけたが、マツは地味に合わないし、勾配が急峻なので作業は不便である。地質は概ね真土であるが脆弱なので、樹木はクリ、クヌギ、ブナの類を多くし、大樹は少しとした。」

当時の治山・砂防の取り組みがよく理解できる。

●1900年度（明治33年）福井県砂防事業第１期工事が始まった。（福井県砂防課：砂防工事1917年（大正６）３月調べ）資料によると、着工から９年間の工事の種類は、石砂防えん堤、水通、導水堤、山腹土砂留、山腹石積、杭柵、積苗工、筋工、苗木植付、岩石切取、護岸石積、床張工、土砂防えん堤などで、総費用は4,450円。

●1908年度（明治41）砂防事業は完了した。その内砂防えん堤は、土えん堤二基、石積えん堤七基。

●1998年、田倉川と暮らしの会が誕生した。住民と都市住民が協働で砂防施設の調査、整備、管理及び利活用活動が始まる。

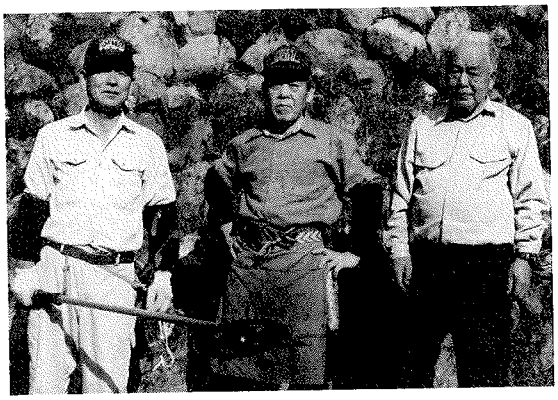
●2004年、文化庁登録有形文化財に九箇所の砂防えん堤群が登録された。

●2006年、アカタン砂防歴史資産活用促進検討会が発足し、官民協働による砂防施設の整備、管理事業が始まる。

●同年　今庄南部山地一帯に点在する明治の砂防堰堤群と、水源のみちを保全しながら訪ね歩く**砂防ハイク**が始まった。これは歴史的砂防施設を水源のみちで繋ぐ**砂防パーク**づくりへの準備である。

●2008年高倉谷砂防西高倉えん堤が登録文化財に登録されることが決まった。

## 2．砂防文化の謎に迫る好奇心、地域活性化の原動力



写真－1　アカタン砂防の語り部

**写真－1**は、アカタン砂防の熱心な開拓者であり、田倉川と暮らしの会と地域の活性化リーダーである。最初に紹介しておこう。左からキヨモン会長、ゴンパさん、オモヤさん。3人はアカタン砂防と地域の語り部で、村の学芸員だと尊敬されている。ゴンパ、オモヤさんは、地域の文献や古文書を判読し解りやすく説明してくれる。3人は何時もアカタン周辺で仕事をしているので、近くを訪れると声をかけられる。3人は仕事中であっても訪問者を気兼ねなく歓迎し、懇切に案内説明している。写真のように山仕事姿で、手鎌、ナタ、ノコギリを腰に装備している。特別の揃いの法被や帽子など着ていない。これがアカタン流の飾らない質素な気質である。3人は地域活性化のリーダーである。

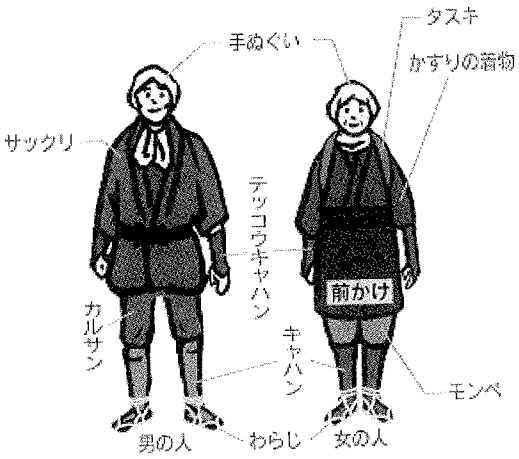
アカタン砂防は、先人たちの造った遺産**砂防遺跡**である。私たちは先人達の歴史的砂防文化を探り出すため、古老から**記憶の収集活動**を始めた。アカタン砂防の歴史の謎に迫る発端は、母の記憶の風景であった。

1998年母86歳の記憶には「アカタンに幾つかの石垣（石積砂防えん堤）とドブ（池）があって、少年の頃水浴びを楽しんだ。」と言う。さっそく現地調査に出かけたが、渓間は藪に覆われその風景を見つけ出せなかった。アカタンには沢山の田畑があったが、土砂流出災害で埋められ田畑に回復できずスギを植林した。そのためアカタンへの出入は年毎に少なくなった。30年ほど前から、スギの手入も手薄になってきたと言う。社会環境の変化もあって、アカタンの渓間は一層藪に覆われてしまった。当時の災害や防災工事、砂防堰堤のことなど、すっかり住民から忘れ去られていた。

ところが、小学校の副読本（私たちの郷土宅良の里：宅良小学校：1974年8月）には、1921年古木集落に始めて電気が通った頃、次のような歌が流行ったと記録されている。

**宅良で名所は古木村　砂防に堤防に長い橋**
**お宮の石垣、赤い屋根　宗派が七派に寺五寺**
**郵便局に駐在所　電気も自動車も古木まで。**

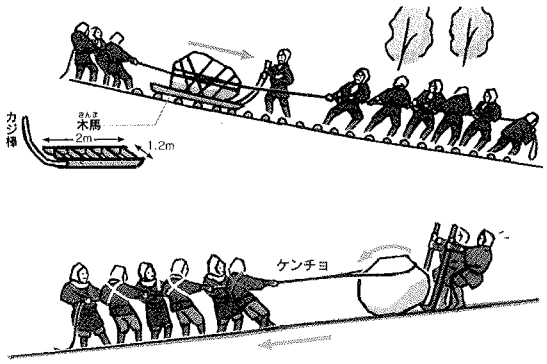
砂防と堤防を掲げている。古木の住民はアカタン砂防に関心があり、当時から遺産として誇りを持って伝えていこうとしていた証拠だ。私たちは地域に住む古老の石工さんからも記憶を収集し、山村の砂防文化を記憶画で再現した。




図－1　記憶の収集から描いた当時の仕事着姿

**図－1**の絵は、地域固有の仕事着姿である。このような姿で、当時砂防工事に従事していたと思われる。昔は何処の村でも麻や綿花を栽培し、手織で野良着や仕事着を自給していた。絵のような地域共通の仕事着姿は、協働・連帯感を高めるものであったと思う。赤色のタスキは娘さんだけが着けていたという土地の伝

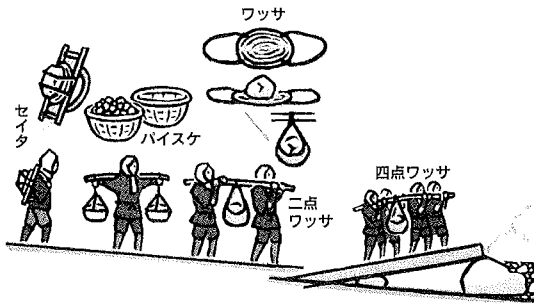
統と風趣が感じられる。**写真－１**と比べると暫くの間に服装も随分変化したものだ。




**図－２　石工の記憶から描いた木馬（キンマ）引きとケンチョ**

**図－２**の絵は、谷間に散在する巨石を運び出す記憶画である。木馬（キンマ）に岩石を載せ、カジ棒を操りながら運ぶ方法だ。木馬の通路には堅木の丸太を並べて滑りやすくしている。石工さんは、近年までこの方法で野面積みをしていたと言う。当時の木馬をオモヤさんが探し出し、コア施設に展示している。

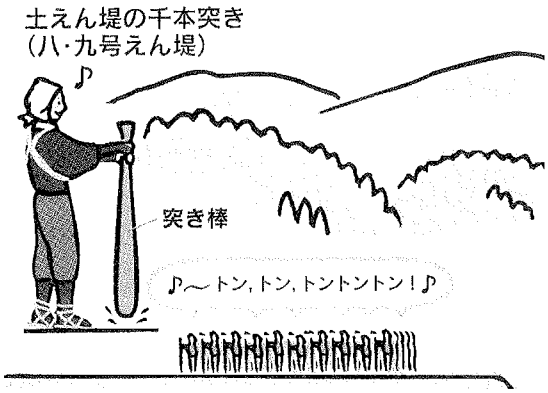
ケンチョもなかなか効率よい運搬方法である。このように大勢の人が、力を合わせながら工事が施された。地域の伝統的な作業方法である。




**図－３　女性も参加した野石運びの記憶図**

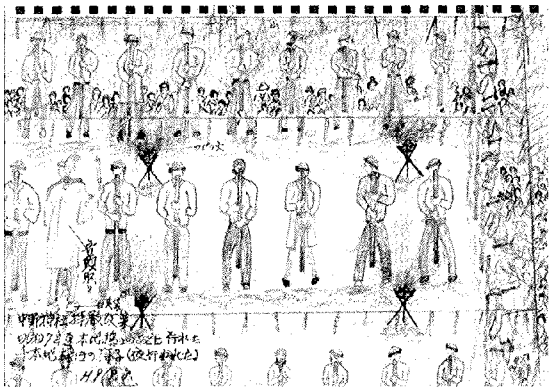
**図－３**の絵は、石を運ぶ道具と方法である。岩石の大きさによって使い分けている。女性は主にセイタ（背中あて）に石をくくりつけ背負って運んでいた。小石は砂利籠のパイスケに入れ、天秤棒で担いで運んだ。作業用一輪車が普及するまで、もっぱらこの方法だった。私は、1960年パイスケ作業を手伝った記憶がある。巨石は２人で担ぐ２点ワッサ、４人で担ぐ４点ワッサ、８人で担ぐ８点ワッサなど重量によって担ぎ棒と人が増える。これも担ぐ人全員の息が合わなければ運べない。

古木の歌門宇太郎さんの記録（1987.4）には、工事に就業した人は、一日200～300人を数えたと記録されている。老若男女それぞれに配慮した道具と作業方法が伝統として継承されていた。




**図－４　土堰堤締め固めの千本搗き想像図**

**図－４**の絵は、九号土えん堤、八号土えん堤の築堤工事千本搗きの想像図である。歌門宇太郎さんはこの様子を次のように記録している。「私が小学一年生のころ、アカタンの土えん堤工事の見学に行きました。私は珍しいので、一日中見ていました。総勢20名が孫呂谷の山を崩して、赤土を男女二名が数珠つなぎのように担ぎ出している。老若女性40～50名が10名ぐらいの横隊になって、美声の人の音頭に合わせ歌いながら千本搗きをしている。幅７～８ｍ、長さ50～60ｍのえん堤を、西へ東へと歌とともに右往左往、とても面白くお祭りのようでした。」



**図－５　辻本喜平氏記憶画、中野神社改築工事の千本搗き**

**写真－２　大平ミズヤ上・下堰堤**

**図－５**の絵は、辻本喜平氏（89歳）の記憶の絵画。昭和７年福井県鯖江市中野神社拝殿改築工事の千本搗き風景である。古来大勢の協力で造り上げる伝統の千本搗き行事が引き継がれている。搗き棒による土の締め固め方法は、万里の長城の修復で現在行われている。異なっているのは棒の先に直径20cmほどの底が平らな石が取り付けられていることだ。数人がリズムに合わせて作業するのは、何処の国も同じのようだ。

アカタン砂防には２ヶ所の土えん堤があり、九号えん堤は、堤長25m、堤高８m、八号えん堤は大規模で、堤長112m、堤高11m。土造りの巨大な砂防えん堤が、明治時代に造られた。100年経っているのに、何処にも損傷がなく立派に役目を果たしている。

**写真－３　奥の東堰堤**

## ３．砂防遺跡の新たな価値が原動力

アカタン砂防施設は、ほとんど壊れることなく築造時の姿で砂防の役割を担っている。

**写真－２**は、アカタンの一番上流にある大平ミズヤ上・下えん堤（堤長20m、堤高7.5m）。堤頂に丸みと縄たるみ技法を使った美しい曲線の造りである。**写真－３**は奥の東えん堤（堤長25m、堤高８m、導流堤21m）。堤頂が水通しに向かって緩やかに勾配をつけている。角を取って優しい丸みがある。水通しは新鮮な岩盤に取り付けて導流堤を設けてある。

アカタン砂防えん堤は、何れを見ても自然の摂理にかなった単純明快さと効率よく万能な造りである。水が自由に流れるように、地形地質と流れに素直に従った自由自在の造りである。石材は渓間に存在する自然が与えた野石である。石工は、野石の面と対話し吟味しながら積み上げている。自然の岩石をそのまま積み上げる野面積みによる空積み工法は、排水性に優れるが崩れやすいので、５m程度が限界と伝えられる（城郭の構造について：西ヶ谷恭弘）。アカタン砂防の石積み砂防えん堤は、堤高７～８mの巨石野面積みで、安定した安心感を与えてくれる。訪問者はその姿に対面し、日本伝統の石積み造形美の感性に魅了される。人間と自然が対立ではなく、順応した世界で造り上げた**自然の美しさ**、実用の機能を果たし続ける**実用の美し**

さに気付いた。

アカタン砂防えん堤は、記憶絵や想像絵のように、大勢の人々の協力によって造られた。石積の厳しくつらい作業、気の遠くなるような搗き固め作業から生じる喜びが醸し出す**協力の美しさ**、**労働の美しさ**を感じる。

アカタン砂防えん堤は、何処にも存在しないアカタンの環境と適応した固有の美しい形をしている。不思議なことに、同時期に造られた高倉谷や大鶴目川の石積砂防えん堤と造りが異なる。自然から与えられた優れた材料、作業に携わった土地住民の気だて、伝統的な石工の技術などが融合することで、アカタン独特の**地方性の美しさ**、**伝統の美しさ**を生み出している。現在の砂防工事は、歴史の中で必然的に発展し継承されてきた伝統的な砂防技術に代わって、機械化され、人工的な材料で合理的に施工されるようになった。このように造られたものは、出来上がったときは美しくても年月を経る毎に美しさは衰えて行く。

歌門宇太郎さんの記録には、「岐阜県から石積専門工仙吉氏を招いた」とある。しかし、アカタン砂防には建造した記録の石碑が発見されていない。高倉谷砂防には二箇所で石碑が発見されている。そこには工事主任と石工の名前が彫られている。アカタン砂防には、名前を刻んだ石碑が発見されていない。石工玉村さん（83）によると、石工の世界は、技術や工法について親方との関係が重視されると言う。現在でも石工本人とその親方が誰であるかが石工仲間で話題になる。石工には社会的な地位や名を立てようという意識は全くないと言う。代々親方から受け継がれてきた伝統の技術や知恵を発揮できる喜び。土地の大勢の協力によって造り上げる喜び。その土地の良質の自然材料を与えられた喜びが、欲のない石工たちの**無名の美しさ**を際だたせている。

地域活性化の原動力は、このような砂防文化の価値に気付き、先人の偉業に誇りを持ったことだと思う。

**写真－4**は、古木住民が所有している貴重な砂防工事写真。大正時代になると、ある程度加工して揃えた割石を使う石積技術に進化している。写真左の石工が着ている法被の襟に、石・大津と書いてある。大津を

**写真－4　大正９年大谷川砂防工事（古木某氏提供）**

検索すると、熊本県菊池郡大津町に、江戸時代の歴史的石橋が多く遺されている。ここの大津なのか、それとも大阪城の石材を算出した山口県大津（おおず）島なのか。最も近い、滋賀県の大津市坂本近くにある、穴太の石工集団の仲間なのか。未だに解っていない、私たちはアカタン砂防に関わった工事主任と遠方から来たという石工を捜している。私たちのもっとも興味のある謎探しである。

## 4．砂防施設の整備と管理の原動力

田倉川と暮らしの会が立ち上がった1998年以来、砂防施設の整備作業を休んだことがない。現在のような築造時の姿に再生するまで、かなりきつい作業の連続だった。砂防施設が管理放棄され、長い期間に生えた高木を伐採し、雑木、草を刈り取り、流木を取り除く作業が持続できた原動力は何だろうか。**写真－5**は、1988年８月に撮影した発見当時の八号えん堤写真。殆どの人には砂防えん堤の存在を想像できない。**写真－6**は、同じ方向から今年の１月に撮影した。見比べれば住民の保全整備の苦労と意気込みが一目瞭然である。

会の発足と同時に、毎年のように全国のイベントや学会に出かけ、積極的に活動の発表をしてきた。早々と全国区に仲間入りし、川に学ぶ体験活動全国大会まで誘致した。新聞にも頻繁に報道され、訪問者が一気に増えてきた。林道や施設周りの保全整備が追いつか

ない状態であった。

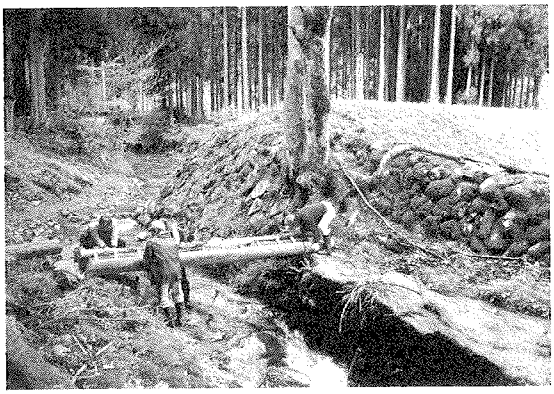
保全整備活動は主に７名の会員（**写真－７**）が主体となって続けている。９基全部の砂防えん堤を再生するのに７年近くかかった。現在は草刈りを年に三回は行っている。イベントや団体の見学予定日前には必ず草刈りをして、きれいな姿で出迎えている。

**写真－５　1998年８月撮影の八号えん堤**

**写真－６　2009年１月撮影の八号えん堤**

**写真－７**は、林道整備をする会員。降雨による林道の崩れは激しく、雪解け後の落石処理も毎年行っている。林道には訪問者が乗用車で入ってくるので、安全に留意しなければならない。会が誕生して10年目の昨年ようやく林道の整備が一段落した。大平ナベカマえん堤まで小型車で乗り入れられるようになった。しかし林道添いの草刈り落石処理などの管理は常に行っている。

**写真－７　林道整備する会員**



**写真－８訪問者のために橋を架けている会員**

**写真－８**は、八号えん堤に橋を架けている会員。雄大な土えん堤の堤頂に登ってもらおうと、訪問者のために丸太材を伐り出し、橋を渡し階段も造った。苦労して造ったが、これは安全でないということでまもなく撤去した。

**写真－９**は、手仕事の標識。2001年の大仕事で、標識と案内看板を造った。年長者のオモヤさんの筆で、本人に彫ってもらった。オモヤさんは夜なべしながら約半年掛かけ堅いケヤキと奮闘して彫り上げた。自然の良質な材料と、会員の思いが込められた美しい標識だ。手仕事の良さが風景に調和し、訪問者に住民の熱意やぬくもりを伝えている。現在は登録文化財登録によってえん堤名が字名に変更したため撤去され、ベースキャンプに置いてある。大事に遺し伝えていきたい

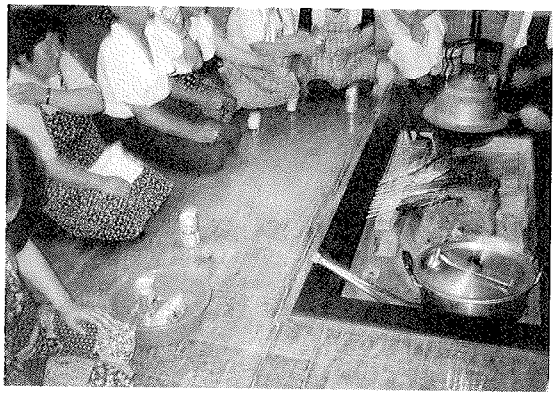
写真－9　手仕事の木製標識

写真－10　住民手仕事の案内板、文章は何度も相談しながら作り上げた

作品である。

**写真－10**は、同時に作製した案内板で、活動当初から計画しクリ材を３年前から探しておいた。説明文章も何度も相談しあい作り上げた。キヨモン会長は、どんな作業も全員が集まれる日程を選び、率先して行動した。作業が終わると欠かさずベースキャンプかコア施設で**振り返り**の話し合いをしている。もちろんビール付きだからお互いに好きなことを言い放題だ。整備作業は男性の仕事であるが、懇親会、キャンプ砂防やフォーラムなどの交流会には、会員の婦人は伝統のたくら料理をつくりもてなしてくれる。活動の持続性を醸成させる運命協同体のような土地の風習が育まれ、故郷を愛する**愛郷心**が地域活性化の原動力となっていると思う。

**写真－11**はベースキャンプで会員のご婦人方も交えての炉端交流会。ベースキャンプはコア施設から約１kmの山の家である。電気の他は、生活する設備は一応整っている。会員が仕事のあいまに作り上げた共同の家である。ここをエコミュージアムのサテライトとして、訪問者やキャンプ砂防の舎営場所にも活用している。



写真－11　ベースキャンプで炉端交流する会員夫人たち

## 5．他の地域の学習と交流から生まれた誇り

私たちは発足以来、地域活動を全国に発表しながら自ら学習を続けている。さらに同じ歴史的砂防施設を利活用している地域住民や団体との交流を行っている。

● 2000年10月「アカタン砂防100周年記念穂高砂防実習バスツアー」開催。富山県神通川上流砂防施設、奥飛騨砂防博物館、立山カルデラ砂防博物館を訪問、各訪問先で「砂防ミュージアムづくり」の意見交換を行った。

● 2004年６月アカタン砂防登録有形文化財登録記念シンポジウム「砂防フィールドミュージアムを考える」を開催した。富山県から立山カルデラ博物館、京都府から不動川砂防歴史公園、新潟県からは、万内川砂防公園砂防文化財を活かす地区懇談会メンバー29名が参加した。

● 2008年６月「砂防文化を語る会」巨石積み砂防文化の歴史と登録文化財―岐阜と今庄山地砂防の交流―を開催した。岐阜県から砂防課職員、砂防ボランテアの３名が来られ、高倉谷砂防えん堤石碑に彫ってある工

事主任大屋卯吉郎は、木曽川砂防工事の記念碑にも書かれているという事実が報告された。明治時代岐阜県と福井県の砂防技術交流のルーツが話題になり盛り上がった。

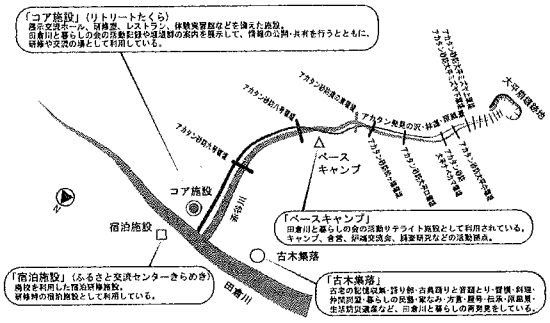
● 2009年３月14日「万内川砂防交流バスツアー」を計画している。ご夫人や石工さんも誘って20名ほどが西野谷住民との再会を楽しみにしている。

全国の活動団体と交流し学習することによって、地域の尊い遺産に気づき地域活動の誇りと自信が増してきた。砂防施設の共通の物の交流だけではなく、砂防遺産、砂防文化を巡る人との交流に発展している。アカタン砂防えん堤は、発見当初行政の専門技術者の興味を引きその分野の訪問者が多かった。まもなく一般市民や学校の学習にと拡がってきた。観光地巡りのスタイルとトレッキング風の訪問者が混同してやってくるようになった。住民は、砂防えん堤を訪問する都市住民の関心に不思議な驚きを持って迎えている。少年達に囲まれ、都市住民の質問責めに合いながら自ら学習することで、生まれ育った地域の誇りを高めてきた。砂防工学の世界に都市住民が興味を持って訪問するようになってきたのは何だろうか。それは土砂災害に遭遇した先人たちの遺産、記憶を砂防文化として捉え、継承されてきた山村固有の暮らしと砂防の関わりを住民から直接探れるところにあると思う。

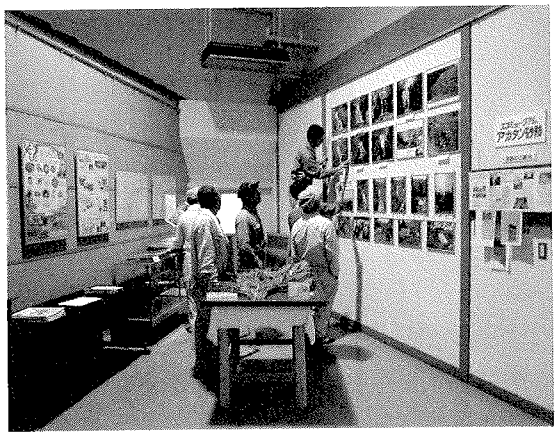
## 6．アカタン砂防エコミュージアム活動

1998年立ち上がった田倉川と暮らしの会は、アカタン砂防エコミュージアムを創り上げた。住民の積極的な活動が官との対話を醸成し、登録文化財登録を契機に、2006年官民協働で保護していく体制にまで発展した。

**写真－12**は、アカタン砂防のコア施設リトリートたくらの展示施設である。最近は砂防パークのコア施設としての役割も拡がり、各地域のパンフや資料を置き、活動報告や案内、保存資料などを常設展示している。写真は、水源集落瀬戸の住民が、高倉谷砂防施設の写真やマップを展示しているところ。調査、保存、展示する常設施設は活動の持続発展に重要な場である。




**図－６　アカタン砂防エコミュージアムマップ**



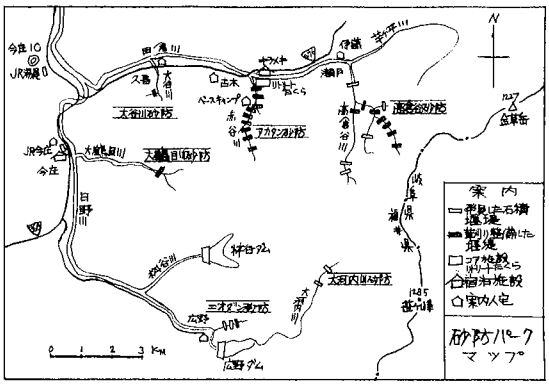
**写真－12　コア施設内展示コーナー**

私たちは、**領域**（アカタン、田倉川、集落）と**遺産**（明治の砂防施設群、民間風俗、自然環境）と**記憶**（古老の語り部）そして**住民**を備えた博物館をエコミュージアムと理解している。すなわち、アカタンや田倉川周辺の環境を含めた**家**である。**博物館活動**としての多様なプログラムがあり、遺産をあるがままの姿で**現地保全**と維持管理している。**住民の主体的参加**の３要素が出来上がっている。

## 7．新たな価値を目指す砂防パーク

1895年の土砂流出災害は、今庄南部山地一帯に発生した。アカタン砂防と同じように明治の歴史的砂防施設は、今庄南部山地各地で発見された。田倉川と暮らしの会が呼び掛け、各集落と協働で各地の砂防遺跡を

探し、整備を始めている。




**図－７　砂防パークづくりマップ**

**図－６**は、砂防パークづくり活動のマップ図である。アカタン砂防から始まったこの活動は、他の集落や地域と連携しながら広域に進めて行きたいと思っている。これまで、砂防パーク領域で歴史的砂防施設６ヶ所を各集落の人たちと一緒に調査し、藪に覆われた砂防堰堤を再生した。歴史的砂防えん堤は28基その内19基を草刈り、流木の撤去などして整備した。各地域の集落が地域的連携することで、新たな砂防遺跡の価値を生むことになった。

田倉川の最上流瀬戸集落に「高倉谷石積砂防えん堤の会」が2001年５月立ち上がった。会長タケオさんら11名の住民は、地域の連携のなかで独自の活動を展開している。彼らは、**水源集落「瀬戸」**というブランド名で活動している。瀬戸集落の固有の資源と歴史文化を探し出し、学習し合っている。現在１２ヶ所の明治の石積えん堤を発見し、７ヶ所を草刈り整備して甦らせた。

**写真－13**は、2007年４月開催された水源のみち・高倉谷砂防ハイク。このイベントのため、住民は約１km の谷を整備し登山道を造って都市住民を迎えた。アカタン砂防にも参画しているタケオさんは、発足当時から文化財登録を目指していた。町役場の文化課学芸員と一緒になって調査測量し、12ヶ所の砂防えん堤の申請に力を注いできた。昨年12月、ついに**西高倉えん堤**（堤高９m、堤長19m）１ヶ所が登録文化財に登録されることになった。住民と行政の協働作業の成果である。

**写真－13　高倉谷砂防立成（たてなり）四号砂防えん堤**

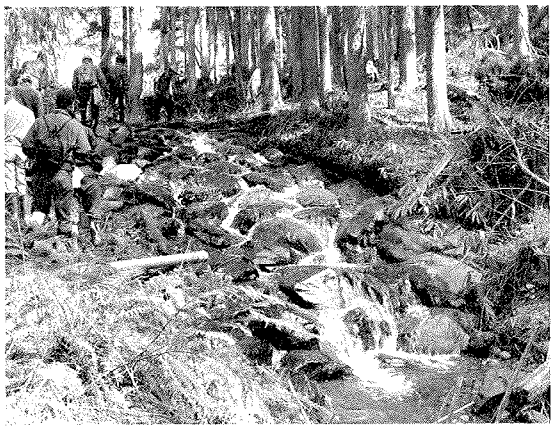
会長のタケオさんの自宅が集落の中央にあり、案内施設になっている。そこには高倉谷砂防施設へのマップや写真が展示してある。集落から少し離れた山小屋に会員が提供するベースキャンプがある。ここが活動の拠点であり、会員や都市住民が寄り合うサテライトとなっている。すでに12ヶ所の砂防えん堤の木製標識を手仕事で作った。雪解けを待って、標識を設置するイベントを計画している。

**写真－14　大河内砂防上えん堤**

**写真－14**は、大河内砂防上えん堤。ほぼ垂直に野石を積み上げている。巨石が美しく圧倒される。未だ詳

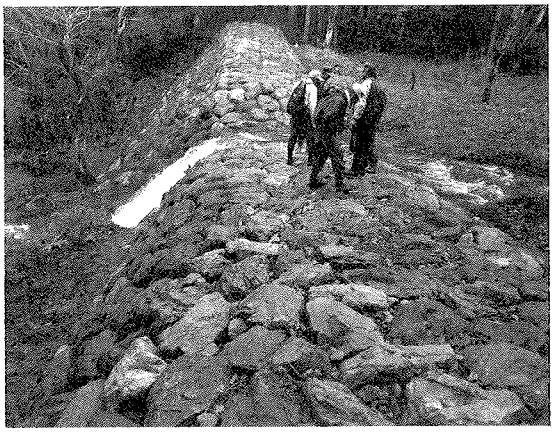
しく調査していないので今後楽しみにしている砂防えん堤である。大河内は、昔はサクラマスが沢山上ってきたという日野川源流の水源集落だった。すでに廃村となって、離村した人が時々キャンプしながら畑仕事をしている。

**写真－15**は、広野砂防ニオダン下えん堤と呼んでいる。大きな野石を敷いた斜路工は、巨石文化の風格を見せてくれる。その他に、中えん堤、上えん堤の２基の砂防えん堤がある。上えん堤は砂防パークイベント、水源のみち・砂防ハイクとして2006年草刈りを行い整備が行われた。



**写真－15　広野砂防ニオダン斜路工（床固工）**

**写真－16**のシジャミえん堤は、河道の真ん中に岩盤が露出しているので、そこを基礎に水通し施設を配置した大きな石積み砂防えん堤である。自然の地形地質をうまく利用している。ここも藪に覆われていて、発見当時僅かに水通し部分の石積が見えた程度であった。2006年の水源のみち・砂防ハイクを開催、藪を伐りはらい多量の流木を取り除いた。粗方の整備の後、シジャミえん堤の会会長のノムラさん（74）夫妻は、２ヶ月かけてえん堤上に溜まった大量の土砂を軽トラで運び出し、ジェットポンプで表面をクリーニングした。地元でもあるノムラさんは石工さんなので、このえん堤には思い入れが強く、その後定期的に管理を続けている。近く標識を建てたいと準備している。

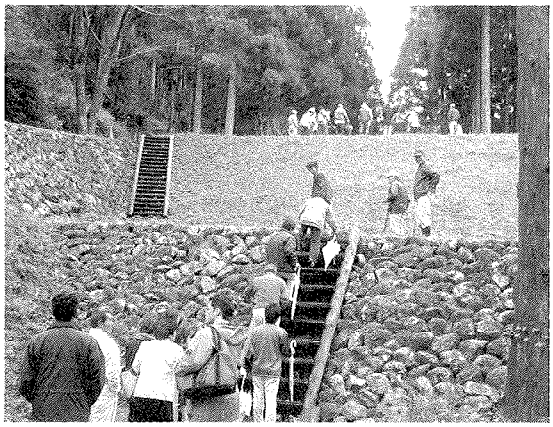


**写真－16　大鶴目川砂防シジャミえん堤**

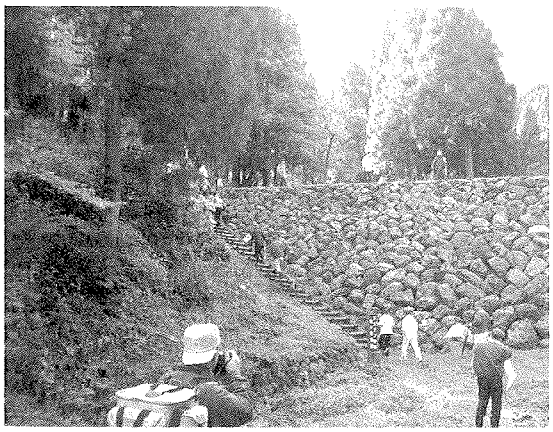
## 8．官民協働事業

福井県は2006年度アカタン砂防歴史資産活用促進検討会を設置した。アカタン砂防えん堤群を活用して、土砂災害に関する防災知識の普及・啓発を図るとともに地域活性化を支援する目的である。検討会は、田倉川と暮らしの会、砂防ボランティア、町、県で組織された。2007年５月10日維持管理委託契約を県、町と締結した。砂防施設の修繕費用は町が負担し、大規模な破損は県と町の協議でその都度決めることとなった。契約期間は2011年３月までとし、以降は５年ごとに自動更新していくこととなった。翌年度アカタン砂防は官民協働事業が実施された。アクセス困難なえん堤に対して、周辺環境に配慮した散策路の整備、標識と案内板設置を行った。訪問者は、観光地を行く服装の人が多い。土地の人や林業の作業用軽自動車が通れる林道に、乗用車が入ってくる。全国に紹介するようになれば、訪問者の安全や、心のこもったサインや正しい説明が必要である。

写真－17　新しく設置された案内板と説明するオモヤさん



写真－18　安全に登れるように整備された八号えん堤



写真－19　整備された松ヶ端えん堤

キヨモン会長は、「地域の貴重な砂防遺跡を地元住民が保全していくのは当然のこと、行政とスクラムを組んで地域活性化につなげていきたい」と完成に際して述べた。

## 9．地域活性化活動の方向性

砂防パーク領域の集落は、限界集落と呼ばれる過疎化の一途にある。私たちは、先人達が山を守り水源を保全してきた**水源集落**を誇りにしている。日野川水系の豊かで貴重な水源なのだ。地域には、多くの人・モノ・コト資源が見つかった。砂防文化の継承、自主性のある活動、自給性、協働性のコミュニテイなども良い方向性をもって潜在している。これらを活かした、地域活性化プログラムをたてていきたい。過去何度も受け入れた大学生のキャンプ砂防の経験から、宿泊型のキャンプ砂防（石積砂防学校）を計画している。石積み体験を指導する４人の石工さんも元気だ。歴史的砂防技術を調査研究する学術的な資源も山ほどある。熱心な砂防専門家との連携、官民協働体制もできている。

歴史認識、文化認識、暮らしの在り方の環境を知り、自分たちの生まれた土地に誇りを持って活動する住民自身、人間中心のエコミュージアム、砂防パークを目指しています。皆さんの訪問を歓迎します。

申込み問い合わせは、事務局「環境文化研究所」田中保士まで　電話0778-25-6051　yasushi@geology.co.jp

**＜参考資料・文献＞**


●日本河川協会　河川文化13号　2001.3「明治の砂防遺構が九つも連なるアカタン・フィールドミュージアム」

●田倉川と暮らしの会　2001.5「アカタンまるごとミュージアム」－アカタン砂防100周年－活動の記録vol.1

●砂防と治水144号　2002.2「明治の砂防堰堤群まるごとミュージアム」

●日本遺跡学会誌　第１号　2004「明治の砂防堰堤群を活用したフィールドミュージアムづくり－福井県今庄町における事例－」

●砂防と治水182号　2008.4「日野川の水環境と歴史的砂防施設を活用した砂防パークづくり」
●福井県武生土木事務所「アカタン砂防エコミュージアムマップ」
●外村吉之助「民衆的工芸品の特性」
●日本エコミュージアム研究会「エコミュージアム研究」
●民俗自然誌研究会「エコソフイア　第４号」
●写真3,17,18,19は福井県丹南土木事務所提供